

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20530539

研究課題名（和文） 病院組織におけるソーシャルワーカーの専門的業務の形成過程に関する研究

研究課題名（英文） A Study of Social Work Practice within the Framework of a Psychiatric Hospital

研究代表者

岩本 操（IWAMOTO MISAO）

武蔵野大学・人間関係学部・准教授

研究者番号：30326962

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、精神科病院のソーシャルワーカーが組織から要請される「違和感のある仕事」をソーシャルワークの目的に沿った業務へと転換していくプロセス（ソーシャルワーカーの「役割形成」）を明らかにすることである。修正版グラウンデッドセオリーアプローチによる分析の結果、ソーシャルワーカーの「役割形成」とは、利用者と組織「双方の利益を結びつける」営みであり、それを促進する実践基盤は「アイデンティティの止揚によるミッションの具体化」であることが示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research has been to clarify “Role-making” of social worker within the framework of a psychiatric hospital, when they were demanded some task which they felt out of social work. Results of analyzed via a Modified Grounded Theory Approach, “Role-making” of social worker was “process of connecting both profit” between clients and hospital. This process was set forward by the attitude of being “To do their mission through sublimate of their identity”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	2,100,000円	630,000円	2,730,000円

研究分野：社会福祉関係，医療・福祉，社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーカー・専門性・役割形成・精神科病院・業務・修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（M-GTA）

## 1. 研究開始当初の背景

包括的で全体論的なソーシャルワークの専門特性は、周囲から多様な役割期待を受け、その業務の曖昧さが現場のソーシャルワーカー（以下、SW）にとって大きなストレス要因となっている。

今日の保健医療福祉の抜本的改革を背景に、病院は機能分化による効率的な医療提供、病床回転率の向上、地域における医療連携の

強化などが求められているが、そうした病院経営のプレッシャーがそのままSWに降りかかり、SWの業務はますます流動的で方向性が定まらなくなっている。

病院組織が要請する仕事を無反省に受けることはソーシャルワーク機能の低下を招くが、SWが経験する曖昧さや流動性を否定し業務を限定的に捉えてしまえば、その専門性に抵触することになる。保健医療福祉の変

革期において、SW は病院組織が要請する多様な仕事を、SW の専門的な視点から解釈・修正し、周囲との相互作用を経てソーシャルワーク実践へと転換していく力がより求められている。

ソーシャルワーク研究において、これまで、ソーシャルワークサービス利用者に対する直接援助技術の理論や実践モデルは積重ねられてきているが、実践環境である組織に対する実践モデルの開発は関心の乏しいところである。また現場のSW は既存のソーシャルワーク業務の枠組みに分類できない仕事を相当量行っているが、それらの仕事は研究対象から周辺化され個々のSW の試行錯誤に留まっている。こうした現実的問題に着目し、SW が組織から要請される多様な仕事に対して、如何なる試行錯誤を経てソーシャルワーク機能につなげようとしているのか——そのプロセスを理論化することは、ソーシャルワーク実践・研究における今日的課題と考えられた。

## 2. 研究の目的

(1) SW が所属する組織から要請される多様な仕事の中で、既存のソーシャルワーク業務の枠に分類できない仕事（新規の仕事、ソーシャルワークか不明の仕事、SW が違和感を覚える仕事）に注目し、それらの仕事に要請される背景・要因とSW の評価・対応の傾向を明らかにすること。

(2) 上記の仕事に対して、SW が如何なる解釈や相互作用を行うことで専門的な行為を展開していくのか、その一連の流れをSW の「役割形成」<sup>(注 i)</sup>と規定し、そのプロセスを理論化すること。

(注 i) : シンボリック相互作用論における役割概念。「役割形成」とは、「役割期待」と「役割行為」を区別し、行為者は他者の期待を一定の立場から切り取り、それを選択的に知覚し、認識し、解釈し、他者の期待を修正し再構成して行動することで絶えず役割を作り出していくという相互作用の過程を意味している。更にここでは、単なる行為者の再解釈、状況規定の変更といった適応技術のみならず、役割期待に沿わない行動や社会・組織の変革を意図した積極的解決行動も一つの役割形成のありようとして捉えている(Tuner1962, 船津 1976)。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究対象 (焦点化)

本研究は、精神科病院におけるソーシャルワーク実践を対象とし、SW が病院組織から要請される「違和感のある仕事」に直面した場面における「役割形成」に焦点をあてた。その理由は上記の問題現象がより顕著に現

れる領域及び場面であるため、SW の「役割形成」(相互作用)のプロセスが可視化でき、またその有用性が高いと考えたからである。

### (2) 研究方法

2つの予備調査(探索的調査, 実態調査)を実施し、その結果を踏まえて本調査を実施した。

① グループインタビュー調査(探索的調査)  
精神科病院に勤務するSW が経験する「違和感のある仕事」の実態について、以下の2つのグループに対してインタビューを実施した。

- ・《管理職グループ》: 経験10年以上でソーシャルワーク部門の管理職にあるSW6名(2008年9月10日実施)
  - ・《若手グループ》: 経験年数2年以上~5年未満のSW5名(2008年12月8日実施)
- インタビュー内容を調査協力者の了解を得て録音し、それを文字化したデータから各グループの内容分析に加えて2つのグループの複合分析を行った。

### ② アンケート調査(実態調査)

全国の精神科病院に勤務するSW を対象に質問紙によるアンケート調査を実施した。社団法人日本精神科病院協会会員病院(1012病院)を都道府県別に並べ、更に精神科病床数順に並べたリストから等間隔抽出法にて抽出した606病院に勤務するSW 宛に質問票3部を送付し、回答を依頼した。調査期間は2009年4月1日~5月20日(最終回収日6月11日)である。

質問項目は「SW の属性」、「所属機関の属性」、「専門性に関する意見」、「違和感のある仕事(38項目)」<sup>(注 ii)</sup>の《実施度》《組織からの期待度》《SW の評価》とし、結果の集計と項目間の関連を分析した。

### ③ M-GTA 研究(本調査)

上記①②の調査結果を踏まえて、方法論的限定を行い、修正版グラウンデッドセオリアプローチ(M-GTA)による分析からSW の「役割形成」プロセスを明らかにした。

M-GTAは「分析テーマ」と「分析焦点者」からデータの分析を行うが、本研究では、「分析テーマ」を「精神科病院のSW が組織から要請される違和感のある仕事をSW として『役割形成』していくプロセス」とし、「分析焦点者」を「精神科病院に勤務するソーシャルワーク経験10年以上のSW」と設定した。

調査協力者は、精神科病院におけるソーシャルワーク経験が10年以上であり、且つ調査時点で精神科病院に勤務していること、精神保健福祉士の資格を有していること、主な担当業務(部門)が病棟・外来のソーシャルワークであること(デイケア、訪問看護部門

等の専属で業務に診療報酬上の規定があるものは除く)、所属組織の期待や要請を認知している、あるいは認知する立場にあること、以上の要件を満たし、病院組織からの役割期待とソーシャルワークの専門性との調整を図り能動的なソーシャルワークを展開する一定の力量を有していると認められる12名に依頼した。

調査協力者に対する個別の半構造化インタビューによりデータを収集した。以下のインタビューガイドを予め提示した上で調査協力者に自由に話してもらい、その話の流れにおいて研究者の意図的な質問を加えた。それぞれのインタビュー時間は90分～120分程度である。調査協力者の同意を得てインタビュー内容を論音し、それを文字化したものから調査協力者の全コメントを抽出したデータを分析対象とした。調査期間は2010年3月～2011年3月である。

<インタビューガイド>

- ・ 普段、仕事をしている時、自分の行動や判断の基準としているもの(こと)は何か。
- ・ これまで病院組織から期待・要請された仕事の中で、特に違和感や不満を覚えたものをいくつか挙げて下さい。
- ・ それらの仕事を要請された時、どのように評価・解釈し、どのように対処しようとしたか。そして実際にはどのように行動したのか(なるべく具体的に)。
- ・ それらの仕事の遂行パターンについて、自分ではどのように評価しているか。

(注ii) : 38項目の仕事例は、先日のグループインタビュー調査及び先行調査(岩本ら2006)の結果から設定した。また本アンケート調査では「違和感のある仕事」を「SWが行うべきか迷う仕事」と読替えて質問している。

#### 4. 研究成果

##### (1) 調査結果

##### ①グループインタビュー調査結果

SWが経験する違和感のある仕事の内容は、〈病院経営〉〈運営・管理〉〈ベッドコントロール〉〈面倒事の請負〉〈間に入る・隙間を埋める〉〈他部署・他職種の業務の請負〉〈担当不明の仕事〉の7つが抽出された。またそれらの仕事に要請される背景・要因として〈ソーシャルワークの特性〉〈SWの力量〉〈他職種の都合・誤解〉〈慣例〉〈経済面〉〈組織の問題〉の6つが抽出された。

2つのグループとも「違和感のある仕事」の内容によって肯定的評価と否定的評価とに分かれていたが、《若手グループ》が「違和感のある仕事」が要請される状況自体を肯定的に捉える傾向にある一方、《管理職グループ》は「違和感のある仕事」が発生する状

況自体は問題視しており、その状況を改善するためにSWが関与することに肯定的評価をしていた。そして《管理職グループ》はSWの視点から仕事内容を解釈・修正し、状況改善に向けて周囲に働きかける傾向が見受けられた。

##### ②アンケート調査結果

回収数は268病院(回収率44.2%)、655票の有効回答を得た。

<回答者の基本属性>

- ・ 性別：男性42.6%，女性57.4%
- ・ 平均年齢：32.6±8.9歳
- ・ SWとしての経験年数：7.3±7.1年
- ・ 精神保健福祉士有資格：99.2%
- ・ 職位：管理職25.3%，一般職74.0%

<専門性に関する意見>

SW業務範囲を「限定すべきである」と考えるものは極僅かである一方、「限定すべきでない」とも言い切れず、判断保留の立場が大半を占めていた(60.6%)。

<違和感のある仕事の実態>

「違和感のある仕事」として挙げた38項目の業務について、《実施度》及び《組織からの期待度》が高い業務は、《SWの評価》も高くなる傾向が示された。さらに、38項目中34の業務について「SWが行っても良い」と回答するものが最も多い割合を示す一方、「SWが行うことに意味がある」と回答するものは全体的に僅かな割合であった。つまり、SWは「違和感のある仕事」を否定はしないが、SWの仕事として意味づけすることもなく、現状に「同化」あるいは「態度保留のまま許容」している傾向が示された。

一方、経験年数との関係を見ると、経験年数が高いほど業務範囲を「限定すべきでない」と回答するものが有意(p=0.002)に高くなるものの、「違和感のある仕事」に対する《SWの評価》では、経験年数が高いほど有意に肯定的評価と否定的評価に偏る傾向が示された。

⇒①②の結果より、経験年数の高いSWは自らが行う業務の範囲を柔軟且つ開放的に捉えている一方、具体的な個々の業務に対して一定の評価基準をもち、SWとして組織関係者に働きかける傾向が示された。よって、このSWの実践プロセスを明らかにすることが、SWの「役割形成」の理論化につながると考えられた。

##### ③M-GTA分析結果

分析結果より、34の概念、5つのカテゴリー、6つのサブカテゴリーが生成された。

<結果のストーリーライン> (注iii)

精神科病院のSWの「役割形成」プロセスとは、利用者と組織〔双方の利益を結びつける〕営みであり、それを促進するSWの実践

基盤は【現場密着型のコア形成】と【ソーシャルワーク主義の脱皮】とを統合した【アイデンティティの止揚によるミッションの具体化】である。

↓

SW は、病院組織から〔経営のプレッシャー〕〔責任回避のしわ寄せ〕などの違和感を覚える仕事を要請されることが少なくない。ここでSWは「簡単に拒否できない」という現実問題に加えて、〔変革者の自覚〕と〔包括的視点の自負〕が働き、それらの仕事を放置できない自分にも直面するという【多元的ポジショナリティの不協和】を経験する。

SWが【多元的ポジショナリティの不協和】から脱する上で注目すべき動きは、徹底した〔ソーシャルワーク探索〕と〔ソーシャルワークのカッコ入れ〕という＜二分するベクトル＞を同時に起動させ、【現場密着型のコア形成】と【ソーシャルワーク主義の脱皮】を相互に関連づけながら展開している点である。

【現場密着型のコア形成】は、違和感のある仕事を「SWだからできること」に転換しようと〔ソーシャルワーク探索〕を行う過程で必然的に浮かび上がってくるものである。SWが今動こうとしている対象は「現前する具体的な利用者」ではないが、〔実践の資源化〕によって潜在的な利用者を想定し、〔エンドユーザーに伝える〕ことを自身の行動の支柱に置く。【現場密着型のコア形成】はSWが「SWであること」にこだわりきる中で生み出された必然的動機づけと言えるが、一方でSWはそのこだわりから距離を置くように【ソーシャルワーク主義の脱皮】を図る。

【ソーシャルワーク主義の脱皮】は、ソーシャルワークの「あるべき論」から一旦離れ、〔ソーシャルワークのカッコ入れ〕から展開する動きである。経営者や他職種はSWとは異なる立場から現象を捉えている。そこにソーシャルワークの視点をいくら強調しても埒が明かない現実直面したSWは、まず自らを経営者の立場に置き、〔組織環境を概観する〕ことで〔経営のプレッシャー〕の背景を理解する。そして病院経営が成り立たず医療サービスが機能しない事態は利用者利益を損ない、利用者ニーズに応えられなければ経営も悪化するという観点から〔経営の再規定〕を行い、【現場密着型のコア形成】に立ち戻りながら、利用者と病院組織〔双方の利益を結びつける〕ことを目指して組織関係者に働きかける。

しかしSWの働きかけは〔医療スタッフの閉鎖性〕による〔抵抗と対峙〕し、＜行き詰り体験＞に陥ってしまう。この困難な局面を乗り越えていくために、PSWは改めて【ソーシャルワーク主義の脱皮】を起動させ、自らが【触媒として機能する】ことで状況の改善

を迫っていく。具体的には、抵抗を示す関係者に対して＜分かってもらうことを手放す＞姿勢で臨み、〔正論は控える〕、〔相手の言葉に入り込む〕ことによって、関係者との相互作用領域を確保していく。その上で〔影響力者への介入〕を図り、関係者が集う場を設定し、関係者が「このままでは自分たちも困る」という〔当事者意識の喚起〕を促し、状況改善への合意形成をもたらすのである。この段階でようやく【現場密着型のコア形成】を基軸としたSWの＜能動的波及＞が関係者に対して効力を発揮し、利用者利益に適った組織機能の活性化が図られ、〔双方の利益を結びつける〕仕組みが組織に定着していくのである。

以上が、違和感のある仕事を要請された状況におけるSWの「役割形成」プロセスであるが、この一連の動きを支えているのは【アイデンティティの止揚によるミッションの具体化】であり、SWの「役割形成」に不可欠な内的特性である。SWは【現場密着型のコア形成】を保持しつつ、それと相反するような【ソーシャルワーク主義の脱皮】を図っているが、両者を統合した実践基盤を形成することでソーシャルワークの根源的使命である「利用者利益」の具体化を目指していたのである。

## （2）結果の意義

①研究結果は、包括的な視点をもつSWが直面する曖昧で不確かな状況を再構成していくプロセスをSWの「役割形成」と規定し、組織と利用者〔双方の利益を結びつける〕プロセスを提示した。〔双方の利益を結びつける〕こと自体は「生活モデル」に基づくソーシャルワークに他ならない。しかし、「生活モデル」の認識論を実践に反映させる方法が十分に開発されていないという指摘がある中で、特に理論的に脆弱である対組織アプローチの方法展開を明らかにした点は、ソーシャルワーク実践理論の発展に寄与できると考えている。

②研究結果は〔双方の利益を結びつける〕プロセスを構成する主要な特性を相互に関連付けて理論化した。そのうち最も重要な特性が【アイデンティティの止揚によるミッションの具体化】である。ソーシャルワークにおいて、従来からアイデンティティの確立が強調されているが、その過度な要求は矮小化した「排他独自性」に陥る危険性もある。現実的に、様々な価値観を有する人々との相互作用は1つのアイデンティティへの帰属のみでは乗り切れない。結果で示したとおり、SWが既存のアイデンティティに忠実に留まっていれば、組織関係者との相互作用は展開せず、利用者利益を目指した組織改革は困難で

あった。SW が利用者の環境に働きかける機能を果たそうとするならば、異なる価値観やソーシャルワークと対抗する人々の主張を取り込み、既存のアイデンティティとの緊張関係を自らが引き受けることで、立場の異なる人々との相互作用領域を切り開き、環境に変化をもたらすのである。【アイデンティティの止揚によるミッションの具体化】は、異質なものを取り込みつつ昇華し深化していく新たなアイデンティティのあり様であり、まさに包括的視点を基本とするSWの独自性がここに表れてくる。この点が結果から得られた1番のオリジナリティだと考えている。

③本研究は、SW が直面する「違和感のある仕事」に注目し、対組織活動のプロセスに焦点をあてた。これらは従来のソーシャルワーク研究から周辺化され除外されてきた現象であるが、結果は「生活モデル」を実践に反映させる技法の提示となり、従来のアイデンティティ論を再考する機会を提供した。ソーシャルワークの主流から外れた実践は、語る言葉も語る機会も乏しい。こうして埋もれていく実践の中には、実はソーシャルワークの中核を刺激し、新たな理論の発展につながる可能性を持っている。ソーシャルワーク研究が「実践の科学化」を重視するのであれば、実際にSWが行っていることを周辺化せず、その意味を問うことが必要である。それが複雑な現場に堪えうる実践モデルの発見となり、実践現場や教育につなげていけると考えている。

④本研究は、精神科病院のソーシャルワーク実践に限定化したものであるが、組織に雇用されているSWの共通の課題である「職員としての自己」と「専門職としての自己」との二元論を克服し、「職務の曖昧さ」に対する主体的解決行動を示したと考えている。

### (3) 今後の課題

①本研究は M-GTA を採用したが、M-GTA はある現象に対する問題解決を志向した研究に適していることが最大の理由である。分析結果は現場の実践者によって活用され、研究と実践とが相互作用的側面を持つことで理論として成立することになるわけである。今後は本研究の結果が、精神科病院のSWによって応用・検証されることを通して理論としての精緻化・最適化を目指していくことが課題である。

②本研究は、精神科病院のSWの組織活動に焦点をあて、より問題現象を限定化して分析テーマを明確に定めてデータの分析を行ったものである。M-GTA 研究ではこの方法論的限定を行うことが重要であるが、今後は研

究結果を「ミクローメゾマクロ」の包括的な枠組みにおいて考察していくことも視野に入れたい。例えば、SWの組織活動の結果が利用者にどのような変化をもたらすのか、地域の医療システムのあり方にどのように影響していくのか、精神保健医療福祉施策との関連でどのようなアプローチが検討できるのか、など新たな研究テーマの設定が考えられる。

(注<sup>iii</sup>)：文中の [ ] は M-GTA 分析結果より生成された概念、同じく < > はサブカテゴリー、【 】 はカテゴリーを示す。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ①岩本操、「ソーシャルワーカーの『役割形成』に関する文献的考察—病院組織におけるソーシャルワーカーの自己規定に着目して—」, 大正大学大学院研究論集第35号, 査読無, 128-134, 2010
- ②岩本操、「精神科病院におけるソーシャルワーカーの『役割形成』の試み—グループインタビュー調査からの分析・考察—」, 査読無, 鴨台社会福祉学論集第19号, 83-90, 2010
- ③岩本操、「精神科病床機能分化におけるソーシャルワークの課題—急性期病棟担当ソーシャルワーカーへのインタビュー調査による考察—」, 日本精神保健福祉士協会, 『精神保健福祉』78号, 査読有, 148-154, 2009
- ④岩本操、「精神科病院におけるソーシャルワーク業務の形成過程に関する研究—管理職ソーシャルワーカーへのインタビュー調査からの考察—」, 武蔵野大学人間関係学部紀要第6号, 査読無, 143-155, 2009
- ⑤岩本操、「精神科病院におけるソーシャルワーカーの『役割形成』に関する考察」, 武蔵野大学人間関係学部紀要第5号, 査読無, 1-12, 2008

[学会発表] (計3件)

- ①岩本操、「精神科病院における精神保健福祉士の組織活動の実践プロセス—精神保健福祉士の『役割形成』に関する M-GTA 分析結果より—」 第11回日本精神保健福祉士学会, 2012年6月23日, 熊本県立劇場
- ②岩本操、「精神科病院におけるソーシャルワーカーの業務の形成過程に関する研究—2—アンケートによる実態調査の結果と考察—」 第9回日本精神保健福祉学会, 2010年6月5日, 沖縄コンベンションセ

ンター

- ③岩本操, 「精神科病院におけるソーシャル  
ワーカーの業務の形成過程に関する研究  
—グループインタビュー調査における分  
析・考察—」第8回日本精神保健福祉学会,  
2009年6月13日, 静岡県コンベンション  
アーツセンター (グランシップ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩本 操 (IWAMOTO MISAO)  
武蔵野大学・人間関係学部・准教授  
研究者番号: 30326962

(2) 研究分担者

川口 貞親 (KAWAGUCHI YOSHICHIKA)  
産業医科大学・産業保健学部・教授  
研究者番号: 00295776